学位記授与式　学長告辞

皆さん、御卒業、おめでとうございます。

いま、皆さんは、宮城学院女子大学での四年間の大学生活を修了され、新たな志を胸に、社会へと巣立とうとしておられます。私たち教職員一同、そんな晴れがましい今の皆さんに対し、心からのエールを送るとともに、またその旅立ちをともに喜び、祝いたいと思います。

一昨日の学友会主催卒業記念パーティで、何人かの皆さんと直接お話ししました。本学で授業を持っていない私にとって、その対話はとても新鮮な経験でした。「就職は決まりましたか？」、「地元に残りますか？」、「大学生活はどうでしたか？」、「友達はできましたか？」。

そんなありきたりの質問をさせていただきましたが、皆さんは例外なく、屈託のない笑顔で、素直に思う所を語ってくださいました。ありがたいことでした。

たくさんの会話のなかで、何人かの方から、コロナ（Covit19）パンデミックのときの辛い体験をお聞きしました。確かに、2020年2月以来、凄まじい勢いで広がったあの新型コロナウィルス感染症は、私たちの日常生活を一変させました。コロナ・ワクチンによって助けられはしましたが、今思い起こすと、やはりとてつもなく怖く辛い体験だったのだなあ、とあらためて考えさせられます。

本学でも、精一杯の流行対策を講じました。対面授業ができないために導入されたオンラインやオンデマンド授業は、画期的な教育技術でしたが、同時にパンデミック下の大学生活を象徴するものでもあります。教室での対面授業のみならず、サークル活動や大学行事も、ほとんどが休止となったことも残念な記憶です。感染の恐怖と抱き合わせだったみなさんの大学1、2年時の生活は、さぞかし辛いものだったことでしょう。

ところが、です。卒業パーティでお話することのできた皆さんは、パンデミックの辛さを語ってくださった方も含め、異口同音に、宮城学院での四年間の大学生活は楽しかった、よかった、と総括してくださったのです。驚きでした。私はそれを本心からの率直な感想、語りの言葉としてお聞きしました。

宮城学院という学校は、大学も中高も、その教学活動全体の立て付けが、御言葉＝福音の語られるチャペルを中心として組み立てられております。それは、宮城女学校の初代校長プールボー先生の時代から140年近くにわたってずっと維持されてきたものです。プールボー校長先生は、校舎の建設事業や日本人女子生徒たちへの教育体制を作り出すと同時に、日曜ごとの教会礼拝を大切にし、祈祷会を大切にし、聖書の学びを大切にし、そして「ハイデルベルク信仰問答」を用いた教理の学びをとても大切にしておられたようです。

私は、なれない異国の地で未定型な学校運営や教育活動に従事された婦人宣教師の方々の生き方を支えていたであろう、表に現れることのなかった日々の信仰生活の有様に想いを馳せます。そして、そのような精神態度から私たちが学ばされることは、私たちもまた、何事かの働きをしようとする際、知識や技術とともに、それらを用いて生きていく際の精神的な励ましが必要だ、ということです。

本学は、その設立当初の宮城女学校の時代から、実は、宣教師の方々の働きを通して、確かに神の愛と義と慈しみの福音が与えられ、キリスト教的精神世界の共有による恵みが与えられていたのだと思います。そして、それが建学の精神として、現在に至るまで引き継がれている、そんな見えにくい事実に、私たちは目を向けるべきでしょう。皆さんが異口同音に、本学における四年間の大学生活の楽しさを語り、肯定的な評価をしてくださった背景に、私はそんな伝統として共有されてきた精神世界の存在を見いだします。皆さんは、それを、新型コロナ・パンデミックという辛い体験を通してさえ、しっかりと受け止めてくださったのだ、そんなふうに思うのです。

今、2025年3月現在、私たちは、実に厳しいリスク蔓延の時代を生きていると思います。14年前の東日本大震災によって、私たちは、自分たちを支えてくれるはずの大地や海が、実は時として牙を剥くことがあるのだ、という厳しい現実を突きつけられました。地球全体が「地殻変動活発化」の時代に突入しています。熊本地震や能登半島地震を見てもわかるように、私たちはいつ大地震や津波や火山噴火に遭遇してもおかしくない状況の中を生きています。

さらに、絶対安全だとされてきた原発が、まさかの事故を起こした事により、現代の科学や技術の信頼性もさほど高くはない、ということを実感しました。また今回のパンデミックにより、私たちは、医療技術の高度な発展にもかかわらず、今なお、疫病大流行・大量死の恐怖から決して解放されてはいない、という現実も経験しました。

パンデミックとともに始まったロシア・ウクライナ戦争は、80年近くにわたって維持されてきた国際平和のガバナンス構造を見事に破壊してしまいました。国連憲章における安全保障の理念と国際秩序を大きく毀損させたからです。国際政治の世界は今、イスラエル・ガザ戦争も含め、再度第二次世界大戦以前のような「戦争の時代」に突入しつつあります。人類を滅ぼしかねない「核戦争」も再度リアリティを持ち始めています。

私たちは、皆さんを、そのようなリスクの充満した時代状況の真っ只中に送り出さなくてはなりません。かつて、新約聖書の時代、イエス様は弟子たちを宣教のために送り出す際、「わたしはあなたがたを遣わす。それは、狼の群れに羊を送り込むようなものだ。だから、蛇のように賢く、鳩のように素直になりなさい」と言われました。

世の中には愛が充満しているのですが、残念なことに、それは神様の愛ではなく、自分しか愛さない人間の自己愛です。充満した自己愛は、狼の群れにほかなりません。そこには

対立と戦いが必ず生まれます。勝つための秘訣は、戦う相手、戦う場所、状況について正確に認識し、自分の力と能力を見極めることです。その上で立ち向かっていかなければならない。イエス様が言われた「蛇のように賢く」とはそのことです。しかし同時に「鳩のように素直に」と言われます。それは、どのような相手に対しても神様の愛を失わない、誠実さを失わない、落ち着いて毅然とした精神態度を意味します。神様の愛を私たちはそのようにして実現するのです。

しかし、どのように用意周到に準備をしても、私たちは不安や恐怖から解放されません。私たちは、生活の糧を得ることにさえ、恐れ怯えてしまう惨めな者です。イエス様は、そんな私たちに解放のメッセージを語られます。

「だから、『何を食べようか』『何を飲もうか』『何を着ようか』と言って、思い悩むな。‥あなたがたの天の父は、これらのものがみなあなたがたに必要なことをご存じである。何よりもまず、神の国と神の義を求めなさい。そうすれば、これらのものはみな加えて与えられる。だから、明日のことまで思い悩むな。明日のことは明日自らが思い悩む。その日の苦労は、その日だけで十分である。」

（マタイ六:三一―三四）

これから新たに始まる新たな皆さんの人生には、実はこのような言葉で励ましてくださるイエス様が共に歩んでくだるのです。

皆さん一人ひとりが、神様の愛によってしっかりと支えられ、価値ある人生を歩んでいかれますよう、心から祈ります。

みなさん、ご卒業、本当におめでとうございます。

2025年 3月19日

宮城学院女子大学 学長
長谷部 弘